



はだかの王さま (6)

そこで、ふたりのうそつきにた
っぷりお^{かね}金をやって、仕事にかか
るように言いつけました。

ふたりは、機を二台すえつけて、
いかにも働いているようなふりを
しました。けれども、ほんとうは、
機の上には、なんにもなかったの
です。ふたりは、すぐに、

「いちばん上等の絹と、いちばん
りっぱな^{きん}金をください」と、願い



はだかの王さま (7)

出ました。

ところが、絹と金とをもらうと、それをさっさと、自分たちのさいふの中に入れてしまいました。そして、からっぽの機にむかって、夜おそくまで働いていました。

「織物は、もう、どのくらいできたかな」と、皇帝は考えました。

けれども、ばかなものや、自分の役目にふさわしくないものには、



はだかの王さま (8)

それが見えないという話を思い出しますと、ちょっとへんな気持ちになりました。もちろん、自分はそんなことを気にする必要はないと思っていましたが、それでも、ひとまず、だれかを先にやって、どんなぐあいが見させることにしました。

もうそのころには、町の人たちも、この織物が世にもふしぎな性



はだかの王さま (9)

質を持っていることを知っていました。みんながみんな、おとなりに住んでいるのは、わるい人ではあるまいか、それともばかではなからうか、知りたいものだと思っていたのです。

「機織りのところへは、あの年とった、正直者の大臣をやることにしよう」と、皇帝は考えました。「あの男なら、織物がどんなくあ



はだかの王さま (10)

いか、いちばんよくわかるにちがいない。頭もいいし、それに、あの男くらい役目にぴったりのものは、まずないからなあ！」

そこで、年とった正直者の大臣は、ふたりのうそつきが、からっぽの機におかかって働いている広間へは行っていきました。

つづく

